



「ここを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会 常任委員会

< 目次 >

1. お知らせ		4. 「献堂50周年を迎える祈り」	
故ラッサール神父追悼ミサ 2	今月の祈り 7
平和学習会開催		5. 資料紹介	
原爆死没者レクイエム演奏会の開催		「禅と神秘思想」エノミヤ・ラッサール著 8
献堂ニュース朗読テープの貸し出し		6. 部会だより	
2. 聖堂建設の歴史シリーズ		< 霊性・典礼部会 > 8
チースリク神父の「献堂までの歩み」 3	< 平和活動部会 >	
3. 「ラッサール神父」の思い出		< 記念誌部会 >	
1990年故ラッサール神父の追悼ミサ 5		
信徒代表の弔辞 6		

「この場所を私は選び、聖なるものとした。ここにいつまでも、私の名をとどめるために」



< 写真上 >

1950年8月6日に挙行された定礎式。荻原教区長の司式で来賓、信者多数の参列のもと執り行われた。(現在の祭壇あたりに大きな十字架が建てられている。)

幟町教会アルバムより

< 写真下 >

壁面に埋めこまれる前の定礎石。
(現在、聖堂正面の左側木製ドアのあたりに見ることが出来る。)

幟町教会アルバムより



お知らせ

故ラッサール神父追悼ミサ

7月7日は、故ラッサール神父の命日です。14年の歳月が経ちました。献堂50周年実行委員会では、故人の遺徳を偲びつつ、平和への強い願いを祈念して、追悼ミサを行います。ラッサール神父の願った平和の実現のために、お祈り下さい。

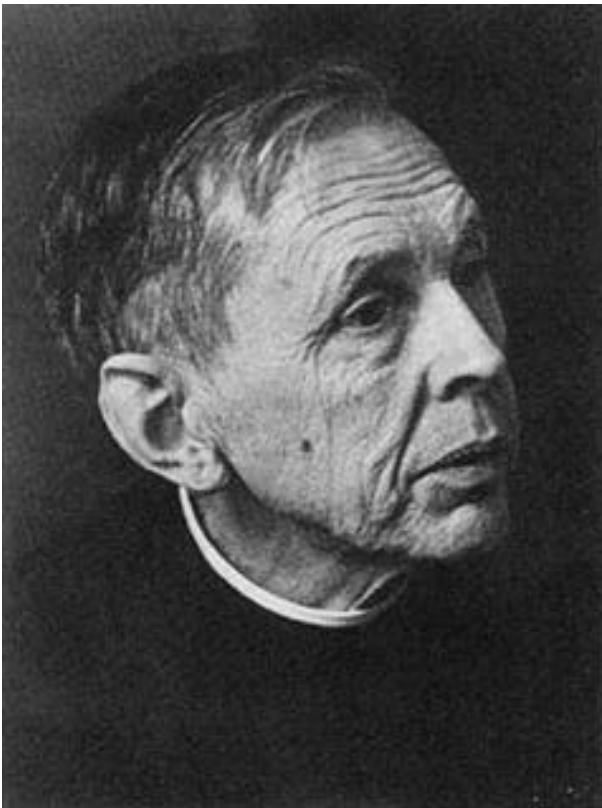
ところ：世界平和記念聖堂 地下聖堂

(広島市中区幟町4-42)

とき：7月7日(水)午後6時より

司式：三末司教

問い合わせ：幟町教会(082-221-0621)



(写真は、長束修練院、柳田神父より)

献堂50周年記念ミサ

8月5日午後7時30分から献堂50周年記念ミサを行います。例年、この日は、広島教区平和行事として全国から多くの人々が参加して「平和祈願ミサ」が行われていますが、本年は、献堂50周年の感謝と平和の実現を願うミサとなります。

平和学習会開催

森瀧春子さんを迎えて「平和をつくる—核兵器のない世界をめざして—」という講演会が開かれます。これは、献堂50周年記念行事の平和学習の一環として開かれるものです。森瀧さんは、インド・パキスタンの平和活動家と交流し、海外に被爆の実相を伝え、核兵器廃絶を訴える活動を行われています。平和活動の現状を知る貴重な機会です、是非とも参加して、世界の平和のことを考えて行きましょう。

とき：7月4日(日)10時30分~12時30分

ところ：世界平和記念聖堂

(カトリック幟町教会)

問合せ：カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

(TEL:082-221-6017)

原爆死没者のためのレクイエム演奏会の開催

50年前の8月6日の慰霊祭でエルネスト・ゴージェンス神父の指揮のもとフォーレ作曲のレクイエムがエリザベト音楽大学の合唱隊により演奏されました。このたび、世界平和記念聖堂50周年に併せて、エリザベト音楽大学同窓生による演奏会が下記の通り行われることになりました。最近では、8月6日の記念聖堂で行われる慰霊ミサでは聞けなくなっています。全曲が聴けるこの機会を、見逃すことがないように、また、多くの市民の方々とともに「慰霊」の歌を捧げたいと思います。

とき：8月1日(日)午後4時~

ところ：世界平和記念聖堂

曲目：フォーレ作「REQUIEM」(全曲)

指揮：門野 光伸

混声合唱：エリザベト音楽大学同窓生

主催：「フォーレのREQUIEMを歌う会」

実行委員会

献堂ニュース朗読テープの貸し出し

献堂ニュースの視覚障害者のための朗読の奉仕を幟町教会の重森さんが担当していただきました。必要な方は、霊性・典礼部会にご連絡下さい。

< 聖堂建設の歴史シリーズ >

ラッサール神父は、早くも1945年後半から、教会の再建について、いろいろと計画を練っていた。まず、1946年1月、住宅営団が売り出した十二畳のブレハブ・バラック2棟で伝道場と集会室を作り、その後、もう一つバラックを買い足して、主任神父の住宅にした。クラインゾルゲ(高倉誠)神父が主任司祭として、そしてシュワイツェル神父が建築係として幟町へ来て、1946年の暮れには戦前の司祭館の基礎の上に新しく司祭館を建てた。その頃、ラッサール神父には、将来の大計画として「世界平和記念聖堂」のプランが頭に浮かび、次第に膨らませていた。ある時シュワイツェル神父は、このプランについて、一度ラッサール神父に話したことがあるとチースリク神父に漏らしている。「このようなプランはあまりにも現実的なものではない。」と。

同年3月ラッサール神父は、ローマでのイエズス会の総会に旅立った。教皇ピオ12世との個人謁見がゆるされ、広島の実験を報告し、世界平和記念聖堂のプランを述べた。教皇はこれを賛成なされただけでなく、これを祝福し、なお、聖庁からの積極的な協力を約束なされた。

ラッサール神父にとってこの謁見は、生涯の最も重大な体験であった。教皇御自身の祝福を受けてからさっそく、ローマを初めドイツなど各地域を回って、広島について講演し、世界平和記念聖堂のプランについて宣伝した。彼にとってそれは、広島のあるいは教区、ひいては日本全体だけではなく、全世界への呼びかけであった。

1947年にラッサール神父は広島へ戻ってから、さっそく自分のビジョンの実行に移った。凡人ならラッサール神父は気が狂ったとも考えたかもしれないが、いま考えてみれば、それはラッサール神父にとって一生の頂点となった。

「終戦と共に日本に新しい時代がはじまった。新しい日本は建設されなければならないが、この新たな日本は古い日本に深くその基礎を持ちながら誕生する必要がある。日本文化には世界に知られずにいる貴い珠玉が存在している。その価値ある宝を失ってはならない。フェニックスがいつもその灰から

生まれかわると同じように、この日本古来の宝が新しい日本に清新な姿で復活しなければならない。...」と彼自身が述べている。(フェニックスとは不死鳥のこと。古代エジプトなどの神話で五百年ごとにヒエロポリスの神殿に飛び、その祭壇の上で自らを焼き、死んで、その灰から再び若い鳥としてよみがえってゆく。要するに、不死永生の象徴。初代キリスト信者は、これをよくキリストの死と復活のシンボルとして使った。こうしてラッサール神父も、広島の実験から新しい神の家が復活してくるというシンボルとして、聖堂の祭壇上の円屋根の上に大きなフェニックスのしるしを建てた。)

とにかく、ラッサール神父は、戦争で大きな損害を受けたヨーロッパ諸国においても、世界平和のシンボルとして、新兵器の原子爆弾で破壊された広島においてこそ世界平和を祈らなければならない、と訴えて、大きな運動を起こした。

1947年に日本へ帰ってからラッサール神父は、その聖堂を、ただ広島教区だけの問題ではなく全国的な運動で建てるために、朝日新聞社の協力を受けて、「広島平和記念カトリック聖堂の建築競技設計」の募集を行なうことにし、実現に踏み出した。

「広島記念聖堂の歩み」(チースリク神父著)を参照



(若き日のラッサール神父とチースリク神父)

献堂までの主な歩み

[西暦]	[主な出来事]
1945年 (S.20年)	<ul style="list-style-type: none"> ・原爆投下により幟町教会全焼(8月6日) ・幟町教会跡地に2坪のバラック建設(12月) ・ラッサール神父、チースリク神父 長束から幟町へ移り住む(12月)
1946年 (S.21年)	<ul style="list-style-type: none"> ・シュワイツェル神父建築担当者として活動開始 ・住宅営団からバラック2棟(12畳分)を購入、つなぎ合わせて聖堂・集会所として使用する(1月)その後1棟をつなぎ合わせて、主任司祭の住居とした(3月) ・聖母幼稚園を再開(4月) ・ラッサール神父、イエズス会総会のためローマへ行く(3月)、ローマで教皇ピオ12世に謁見し、記念聖堂建設の意向を披歴し、祝福を受ける(9月) ・ラッサール神父総会后、ヨーロッパ、北米、南米を歴訪し、広島の惨状を報告 ・旧司祭館跡地に、同型の司祭館落成(12月)
1947年 (S.22年)	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴーセンス神父米国から帰国(4月) ・ラッサール神父日本に帰国(秋)
1948年 (S.23年)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラインゾルゲ(高倉誠)神父に代ってチースリク神父主任に着任 ・朝日新聞紙上で、記念聖堂の設計案を公募(3月) ・ゴーセンス神父音楽学校を開校(4月) ・設計案公募の締切り(6月)応募総数177点 一等該当者がなく 村野藤吾氏に設計を依頼 ・ラッサール帰化し愛宮真備を名乗る(10月)
1949年 (S.24年)	<ul style="list-style-type: none"> ・チースリク神父に代ってラッサール神父主任に着任 ・村野藤吾氏の設計が出来上がる、工事を清水建設が請け負う ・ザビエル・ホール落成する(9月)
1950年 (S.25年)	<ul style="list-style-type: none"> ・世界平和記念聖堂建設後援会結成(1月) ・荻原教区長によって記念聖堂定礎式(8月6日)に続き地鎮祭(10月8日)挙行 ・6月に起った朝鮮動乱の影響で建築資材が高騰し、工事中断 建築費が大幅に上昇 ・戦争及び原爆犠牲者の遺族の方々に建設資金調達の呼びかけ(11月)
1951年 (S.26年)	<ul style="list-style-type: none"> ・大蔵大臣池田勇人氏を代表発起人として「広島平和記念聖堂建設後援会」加入の呼びかけが始まる(1月)、建設後援会会合が東京都工業クラブで開かれる(3月)、高松宮様名誉総裁に就任、募金目標額4,000万円とする ・大蔵省告示552号により、建設後援会への寄付金に対する税優遇措置告示(5月) ・荻原教区長 欧州、北米、南米の旅に出発(7月)(1952年10月帰国) ・建設中の聖堂で平和祈念祭を挙行、高松宮様臨席(9月)
1952年 (S.27年)	<ul style="list-style-type: none"> ・荻原教区長の要請により、ケルン市議会パイプオルガン寄贈を決議(1月) ・ケルン市長より広島市長に書簡が届く(2月)、広島市長、返書を送る(5月) ・建設現場が無事故現場として表彰される(7月) ・後援会募金状況 目標額の35% 1,450万円(7月) ・山口のザビエル記念聖堂献堂

1953年 (S.28年)	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの鐘(平和の鐘)がドイツより到着(2月) ・ロス司教の手によって「平和の鐘」が祝別される(3月) ・献堂式の日を1953年11月3日と決定したが、工事の遅延により1954年8月6日に順延 ・ラッサール神父に代ってトーラ神父主任に着任(9月) ・順次、世界各地から寄贈品が到着
1954年 (S.29年)	<ul style="list-style-type: none"> ・世界平和記念聖堂 献堂式、慰霊祭、竣工式(8月6日) 荘厳ミサ(8月8日) ・献堂記念行事<カトリック美術展、パイプオルガン披露演奏会、記念講演会「宗教芸術の伝統と現代」、神戸六甲学院による吹奏楽演奏会など>(7月30日~8月8日)

(注) 幟町教会吉野氏の提供資料を参考に手元にある資料から年表を作成。

<ラッサール神父の思い出>

7月7日は、フーゴー・ラッサール(愛宮真備)神父の命日に当たります。ラッサール神父は、禅の講演と指導のため訪独された際に病に臥された。そして、聖母の巡礼所である Kevelaer にある病院で大きな腫瘍の手術を受け、「骨が日本の土になる」ことを望み、「日本に帰る」ことを切に願ったが、医者への許しが与えられず、西ドイツ・ミュンスターのイエズス会の修道院で、1990年7月7日、神の御許に昇られた。享年91歳でした。

ラッサール神父が一生涯をかけて求めていた神との結合に到達し、死者の列に安らかに加わった時には、何人かのお弟子さんがそばにいて「神の名を褒め讃えよ」を歌っていた。その第二節に達した時に、ラッサール神父は神に呼ばれました。

ラッサール神父が幟町教会にいた時に、たびたび口していた詩に「Liebe' / O, lieb', / Solang du lieben kannst / O, lieb' solang du lieben magst / Es kommt die Stund', / Es Kommt der Tag, / Wo du an Graebem stehst und klagst, / o, lieb' solang du lieben magst. 」(ドイツ語)「愛せる限り愛しなさい。愛せるだけ愛しなさい。いつかお前は、墓場のそばに立って、愛せるだけ愛しなさいと歌うだろう。」という詩ですが、彼はこの思いだったのだろうとルーメル神父が先の講演会で回想されています。

広島司教区では、1990年7月16日(月)午後6時より、世界平和記念聖堂において三末司教の司式で葬儀ミサが行われました。雨天にもかかわらず、荒木広島市長をはじめ多くの方が参列し、愛宮神父

の功績を称え、献花をしてお別れをしました。

ここに、幟町教会報「平和の鐘」192号に掲載された記事を紹介し、ラッサール神父を偲ぶこととします。

「愛宮神父様は、イエズス会士として昭和4年に来日、11年より広島に在住、幟町教会で被爆。被爆者として世界を回り、広島悲劇を世界に訴え、世界平和記念聖堂の建設に尽力しました。また広島の文化発展に寄与すべく、エリザベト音楽大学の設立(23年)に参画し、48年まで教鞭をとりました。

昭和24年日本国籍を取り、43年には広島の文化振興に対する数々の貢献が認められ、広島市の名誉市民に選ばれました。



禅の研究を中心に東洋の神秘思想とカトリシズムの結合を目指し独自の道を切り開きました。さらに、禅をヨーロッパに紹介し、国際的に注目されるきっかけをつくりました。」

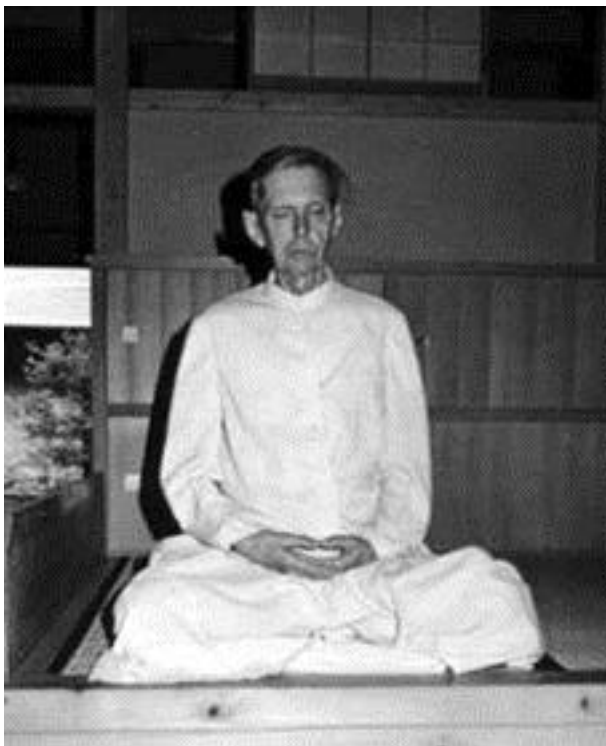
弔 辞

ラッサール神父様。あなたのご苦心で建てられましたこの世界平和記念聖堂にいつも集っております。幟町教会と広島地区の信徒を代表して、お別れのことばを述べさせていただきます。

本当は、しかし、お別れではなく、お詫びのことばをこそ述べなくてはならない思いが、今しきりに私の心に去来してやみません。(中略)

神父様、この世界平和記念聖堂は世界が平和になった記念としてではなく、原爆の犠牲者への思いを込めて、世界の平和を求め、世界の平和を祈りながら、あなたの命をかけてお建てになったものであることは、誰も疑うことができないことでございます。

世界はその後、東西間の不信の中で、核兵器による軍拡競争や、朝鮮半島やベトナムをはじめとする多くの悲惨な戦いを繰り返し、無意味な自然の浪費と汚染と破壊を積み重ねて参りました。一方、日本の国はその間、経済的な発展のみを求めて世界の経



済大国として大きな変化を遂げて参りましたが、そのために世界は南北の間に貧富の差がますます大きくなり、人口の増加と共に困窮の人々は増大の一途を辿っておりますことも周知の事実でございます。

世界の平和は軍備や経済によって築かれるものではなく、私たち一人ひとりの心によって築かれるものであることもよくご存じの神父様は、この世界平和記念聖堂からお離れになりますと、今度は日本人の心の世界を求めて日本古来からの座禅の道の探求に向けて旅立たれました。神父様は本当に心から日本人を愛してくださいました。お名前も何もかも日本人の一人となって、とりわけその長い足の痛みを堪えながら座禅を自ら修得され、日本人の心をご自分の心とされました。そしてそれを生まれ故郷のドイツをはじめ世界の人々にもご紹介されて彼らの心をも豊かにされました。

神父様はそのように日本人の心によって世界の人々を愛されました。それは隣人を自分のように愛し、わけへだてなくすべての人を愛するキリストのお心そのままでした。私たちは今そのお心によって建てられたこの記念聖堂の中にこうしております。

あなたはご自分がこの世から消えた後も、その建物が存続する限りそのお心の人々に語りかけることができることをよくご存じでした。私たちはもはやあなたのご遺言となったこの建物の中に今こうしております。原爆の熱い炎が今度は愛熱の炎となって、この建物から燃え上ることをあなたはいつもお望みになっていたことを私は知っております。しかし知っていても何もできない人間の弱さと、その痛みもあなたはよくご存じです。私たちは今こそあなたの助けが必要です。何よりの助けは生々しいあなたのお心です。この世を去られて今どこにいらっしゃるにしてもこの建物があるかぎり、いいえむしろ、この世から消えられた今こそ、そのお心が大きな声となって、確かに聞えて参ります。ラッサール神父様ありがとうございました。

幟町教会信徒委員長の田島俊治氏による弔辞
写真は、ルーメル神父講演会スライドより

世界平和記念聖堂献堂50周年 を迎える祈り

【今月の祈り】

7月の意向

「地上のもろもろの民が十字架におしえ られて、平和を見出さんことを。」

(ドイツ国ミュンスター市^注から寄贈された

「十字架の道行きレリーフ」銘文より)

カトリック広島司教区のホームページに「平和の使徒推進室室長の部屋」というのがあります。4月のページを見ると、作家大江健三郎の「『新しい人』の方へ」という本の中の「私はただ十字架の上で死なれた、そして『新しい人』となられたイエス・キリストがよみがえられたということ、つまり再び生きられて、弟子たちに教えを広めるよう励まされたということ人間歴史でなにより大切に思っています。」という一文が引用されていました。そして、そこに書かれている「新しい人」のイメージは「何より難しい対立の中にある二つの間に本当の和解をもたらす人」であり、イエス・キリストが十字架にかかって死ぬことで、対立する二つを一つの体とし、「新しい人」に造り上げ、本当の和解をもたらされたことを大切に思うと書かれてありました。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、1981年の来日の際に広島平和記念公園で「戦争は人間の仕業です」との平和アピールをされ、さらに毎年1月1日の「世界平和の日」に平和メッセージをだされ、そこで真の平和を実現するために必要な諸要素を詳しく述べられています。

しかし今、世界を見てみると、聖地の紛争はますますエスカレートし長引いていますし、イラクにおけるさまざまな対立もおさまりそうにありません。今こそ全世界の人々が、イエス・キリストが十字架によってお互いの敵意を滅ぼされたことを思い、真の平和を達成するための努力をするときではないでしょうか。

(注)ミュンスター市はラッサール神父の終焉の地となった。

(聖書の言葉)

実にキリストは私たちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。

(エフェソの信徒への手紙 2章14、16節)

(黙想)

(祈り)

父である神よ、あなたは御子キリストを私たちに与えてくださり、御子の十字架と復活によって、今も私たちの救いのために、いかに心を尽くして働いてくださるかを示してください。かたくなな私たちの心を開き、やわらげ、あらゆる対立する心を和解へと向かわせてください。そして私たち自身が「新しい人」となり、和解をもたらすものとして働いてゆくことができますように。

私たちの主イエス・キリストによって。アーメン



(第12留 イエズス十字架の上に死し給う)

「今月の祈り」は、三篠教会が担当しました。

資料紹介

本書は、ドイツで開催された禅会の参加者たちの要望に応じて1969年にドイツ語で書かれたものの翻訳で、瞑想修行の手引きとして行った講話も含まれている。坐禅の修行を、自分たちのキリスト教信仰に一致させるかどうか疑問をいいて、参禅をためらうむきもある。また無知から、禅の修行を取り入れることに反対する人々がいる。坐禅の修行がキリスト教信仰とけっして矛盾しないことを理解していただきたい。それどころか、坐禅は、キリスト教信仰、キリスト教的祈りを深めるよすがになりうるといっても、過言ではない。禅に対する疑念の底には、「キリスト者であると同時に、仏教者であることが、どうして可能であろうか？」ということがある。それは不可能なことである。両宗教には類似点も多く、互いに学びあうことはできる。どんな宗教にも、一面性という危険がつきまわっている。仏教とキリスト教の間で始まっている思想的交流が、多いに歓迎されると序文に書かれている。ラッサール神父の祈りを理解する上で、貴重な著作の一つである。

「禅と神秘思想」

エノミヤ・ラッサール著(柴田健策訳)

(1994年6月10日 新装第1版)

(1969年5月 ドイツ語版初版)

(B6版 223ページ) ただし、日本語版

<内容>

1. 座禅
2. 座禅とキリスト教的瞑想
3. 座禅の効果
4. 禅とキリスト教神秘思想ほか

部会報告

<総務部会>

8月5日に行われる献堂記念ミサの招待者への案内状を作成し、発送した。

<霊性・典礼部会>

第7回部会で8月5日の献堂記念ミサの式次第と内容などについて話し合った。7月10日に第8回部会を開き、最終的な案をまとめることになった。

<平和活動部会>

1. 聖堂スケッチ(使用画材自由) 平和の歌(平易な作詞作曲作品)を募集中、どちらも締め切りは10月10日。配布チラシ、献堂ニュースを参照。
2. 平和学習会を開催予定。第1回目は7月4日(日)10:30~ 森瀧 春子さんによる「核兵器廃絶をめざして」講演会。第2回目は、9月5日(日)10:30~ 広島大学平和科学センターの篠田英朗さん講演会、演題は調整中。第3回目は、11月7日(日)10:30~ 講師交渉中
3. その他、「諸宗教者の集い」「祈りの集い(24時間礼拝)」など計画・検討中

<記念誌部会>

聖堂が、単なるカトリックの聖堂としてではなく、広く市民や世界の人々の平和の祈りと願いのために建てられたことを再認識できるよう、聖堂の紹介編と建設当時の50年の歴史編の2部構成とし、写真や図を中心に編集する。できれば、建設当時の市民等の切なる願いが伝わるような写真を用いることとし、どのような写真を掲載するかを次回検討する。

<編集後記>

・視覚障害者の方々への朗読奉仕とラッサール神父の黙想指導記録の電子書類化の呼びかけに二人の方が進んで協力を申し出て来られました。献堂50周年を自分のこととして取り組まれる姿勢に感謝しています。献堂ミサの準備、写真や資料の整理など多くの仕事があります。一人でも多くの参加と協力が求められます。(K・A)

献堂50周年ニュース

vol. 01 7月号(No. 6)

2004.07.01 発行

(編集・発行)

カトリック広島司教区

世界平和記念聖堂献堂50周年実行委員会

常任委員会

〒730-0016 広島市中区鞆町4番42号

Tel 082-221-6017

ホムハ°-ジ° <http://www.hiroshima.catholic.jp/>